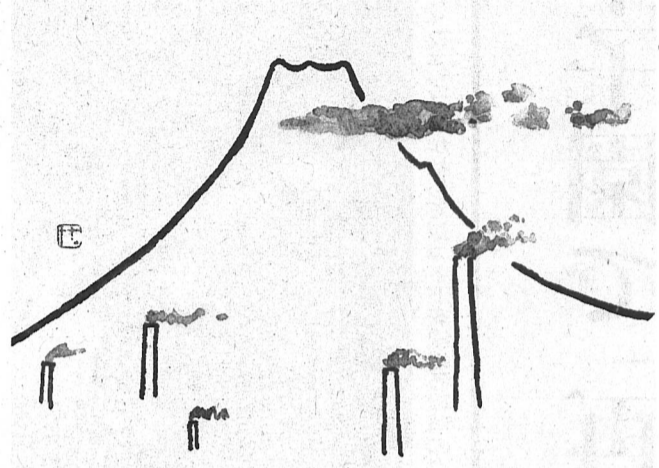


# 朝日 俳壇



〈雲と煙—新幹線の車窓より—〉北村さゆり

春惜む卒寿となれば猶の事 (大津市) 板垣 蚌珠  
 初めての田舎暮らしや風薫る (尾張旭市) 石川 盛久  
 旅人となりて故郷の春惜しむ (盛岡市) 福田 栄紀

【評】第1句、自分が第2句。駅ピアノでシヨ「地球」や「太陽」の後

新緑に見え隠れして隠れん坊 (浜松市) 久野 茂樹  
 子雀に喰はるるバッタ青きまま (古河市) 天野 一夫  
 九条も廊下に立てり令和夏 (横浜市) 田名邊賢治  
 (太宰府市) 彦坂 正孚

【評】椿さん。この月比という昔ながらの詠み葉にズームインする飯坂

どの木にも志ある松の芯 (取手市) 御厨 安幸  
 行く春のうしろ姿やパンを焼く (豊田市) 内山 幸子  
 産道かにホルムス海峡麦の秋 (高槻市) 山岡 猛  
 (松本市) 竹内 齊

【評】一句目、些事しの忌は五月二日、残されたい。四句目、そうい

おさなごの茶碗の中は花の屑 (葛城市) 山本 栄子  
 咲き残る花のいい訳風が聞く (豊川市) 河合 正秀  
 傘差してスッポンの恋に見入りけり (高崎市) 松島 律子  
 (宮崎市) 池江 諭

【評】一席。美しい王「わが家」とするほうか

## 川野里子選

目の見えぬあなたの連れし幼子は全ての爪の切り揃えてあり (さいたま市) 橋 李  
 指差しを不意にはじめた子の指のゆくえを母は息止めて追う (神戸市) 浅田 拓史  
 人殺す兵器の記事の多き朝列鳥いっそう弓なりに反る (東京都) 十亀 弘史  
 トタン屋根にペンキ塗りゆく職人の大きな尻春空にあり (安中市) 鬼形 輝雄  
 一万の兵にも開けぬ城の門桜花にははらりと開ける (豊川市) 河合 正秀  
 満開の桜散る前一瞬の表面張力みたいな季節 (佐伯市) 河北 苗  
 あの日から売れぬ牛らと十五年生きる人あり浪江の牧に (宇都宮市) 手塚 清  
 きゅうぎゅうの後部座席でふり返るたびにちいさくなっていく海 (横浜市) 富尾 大地  
 BL漫画は次々売れてゆく同性婚のできない国で (東京都) 粟生 翠  
 揺れるもの竹群・コスモス・猫じゃらし(こ)までくれば私は揺れない (前橋市) 萩原 葉月

【評】一首目、目は見えなくとも幼子の隅々まで見ている母だ。二首目、何を指し示しているのか、親にとっては劇的な瞬間だ。四首目、鮮やかな構図が鮮やかな色まで感じさせる。六首目、咲き満ちた桜が自らの美しさを留めようとするひととき。

## 佐佐木幸綱選

そこそこに見慣れぬ車と子どもらの突如あらわれ田植の季節 (松阪市) こやまはつみ  
 桜にも老いと死があり改めて知る倒木のニュースを受けて (鎌倉市) 丸尾 啓敏  
 裏白きチラシに明日の予定書きエプロンを脱ぎけふを終ひぬ (伊丹市) 堀 なほみ  
 車椅子より降りしたる母を連れスロープの無き医院に入る (柳井市) 中原 光彦  
 ホタルイカうなずいて食べる父と母私もこの春うなずいてみる (富山市) 松田 わこ  
 村役場勤め上げたる義弟が得度式終へ山寺を継ぐ (戸田市) 蜂巣 幸彦  
 ふるさとの水は琵琶湖に流れ着く黄昏時の川べりの道 (滋賀県) 木村 泰崇  
 大槌の山火事朱く燃え立ちて春夕焼けを怪しく焦がす (盛岡市) 福田 栄紀  
 注文は紙支払い現金のみ今日ももくもく鶏焼く大将 (富士市) 村松 敦規  
 武器輸出猛スピードで同意なく決められてゆく時代は変わった (長野市) 祢津 信子

【評】第一首、第四句まで何を歌っているか分からないような表現で、結句で種あかしをして見せた表現的工夫に注目。第二首、今年は桜の倒木のニュースが多く報道された。第三首、日常の仕草をていねいに表現して斬新。

## 高野公彦選

美しき日本語つかひ抒情歌を詠みたし岡野弘彦のやうに (岡山市) 寺谷 和子  
 耕耘機エンジンの音観自在菩薩行深と唸って動く (埼玉県) 高柳 茂  
 里帰りして目が合ったぬいぐるみ私を判別した後笑う (富山市) 松田 梨子  
 ヘルメットもゲバ棒も要らぬ僕たちは言葉と武器にデモに集へり (朝霞市) 岩部 博道  
 カーテン越しに関西弁の聞こえて来たる緊張ゆるむ入院初日 (松戸市) 羽田さえ子  
 立ったままズボン、靴下はけた今日宝くじでも買ってみようか (アメリカ) 大竹 博  
 嫁ぎたる娘のピアノふと開き一本指で弾くドレミファソ (行田市) 須加 信子  
 死にそうな咳をしながら仕事する母見てゲームをする手が緩む (東京都) 小野寺聡太  
 AIに相談したら停電で役に立つのはろうそくでした (西条市) 村上 敏之  
 鍋持って豆腐を買いに行ったらつけ過剰包装考える時期 (須賀川市) 近内志津子

【評】1首目、4月24日に亡くなった岡野さんへの追悼歌。2首目、濁音の多いエンジン音は般若心経を唱えているみたい、と捉えたのが面白い。3首目、私を覚えていてくれたのね、というユーモラスな歌。4首目、言葉の力を信じてデモに。

## 永田和宏選

エレベーター開けば奴の通夜の席息を吐き切り一步踏み出す (東京都) 本橋 正敏  
 知っているつもりで実は知らぬのは親子と同じ憲法のこと (筑紫野市) 二宮 正博  
 八十年われらを守りてきしものをわれらが守る時が始まる (北海道) 高井 勝巳  
 文京区上へ下へのまつり縫いサデイスティックな丸ノ内線 (さいたま市) 山口 晋裕  
 夕方の虹の話をしたかった友達よりも先にあなたに (東京都) 泉 圭子  
 大阪の駅のぐるりも変はつたがおまへが泣いた喫茶店がまだある (神戸市) 松本 淳一  
 帰りたい帰りたいと入所者が家族が来ると何も言はない (高松市) 黒岡 信幸  
 故郷ではその辺にいととる君をほたる祭りに引っぱって行く (東京都) 上田 結香  
 物の影川面を滑りゆく先に水音を傳てアオサギとなる (八尾市) 吉谷 往久  
 猫餌の売り場を見ることができず目を伏せて押す買物カート (横浜市) 友常 甘酢

【評】本橋さん、親友か悪友か。なぜこいつの通夜にと、一步を踏み出すまでの逡巡。二宮さん、改正論議のかまびすしい憲法だが、実は読んだことがないという人

### 短歌時評 「世代」と「時代」

山崎 聡子

おひなさま二体を紅蓮の炎に焚いて娘はしあわせに暮らしています  
 煙谷隆子  
 まつてくれなにも俺たちを食べてどうするこくみんだよ蛙だよ 平井弘  
 国民的アニメを国はあといくつ受けとめることができるだろう 我妻俊樹  
 短歌研究5・6月号「300歌人新作作品集」から引いた。本特集は性別・年齢順の掲載を数年前に五十音順に改めたが、そこで露わになったのは、世代の括りが消えたとき、「時代」が読みに反映されることだ。霧島の「彼女の彼女」からは婚姻を享受できない人々への心寄せを、煙谷の歌からは婚姻が縛り付けてきたものの存在を読み取れるかもしれない。また、平井・我妻の歌からは国と国民の瓦解した関係を重なることも可能だ。一方、時代の共通項を見出すことは、読みを恣意的に曲げることとも紙一重だ。霧島と煙谷の歌における「婚姻」への距離感の違い、戦時下に幼少期を送った平井が描く不気味な声について考えつつ、個別の表現の必然性を深掘りするこの大切さを再確認したい。(歌人)

第4回稲畑汀子賞 日本伝統俳句協会の主催。高知市の伊野部哲也さん(72)の句集「永永無窮」(文学の森)と千葉県市川市の坂井諒一さん(44)の句集「残影」(角川書店)に決まった。  
 第17回田中裕明賞 ふらんす堂主催。東京都港区の板倉ケンタさん(26)の句集「一花一虫」(ふらんす堂)に決まった。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ ネットから応募できる